



今月の御聖訓



命と
 一におい身分の珍寶也
 百あふらんれんりあ
 ちゅうりあの人ふま
 すと

命と

申ス物は一身第一の珍寶也。
 一日なりとん^(も)これをのぶる
 ならば、千万両の金にも
 すぎたり。

【可延定業御書 全集九八六頁】

目 次

今月の御聖訓

お講講話 御本尊とは法華經の行者の一身の当体なり……………	菅野憲道	1
天地つかの間〔その㉔〕……………	成田詳道	8
私の日蓮観……………	幸田露伴	9
読書案内『池田大作金脈の研究』……………		12
「弟子分帳」と十七回忌〔十八〕……………	松田銘道	13
ちょっと寄り道㉔〈新旧交代〉……………	森田観道	18
【新刊書紹介】〔『興風』11号一日興上人研究特集一〕……………		19
恵日だより……………		20

六月の行事 今月の宅お講

御本尊とは法華経の行者の一身の当体なり

菅野 憲道

《法華経信仰と仏教宗派の成立》

御本尊は、根本尊敬といって、一番大切なものですから、どの宗派においても最も重要な信仰・教義の要諦であり、成仏道の根本であります。本尊なくしては宗教は成り立ちません。どのような本尊を立てるかは、所依の經典によるのでから、根本經典が決まれば、本尊は案外たやすく決まるのではないかと思いがちですが、実際には一つの經典でも、解釈の違いから種々の説が生まれ、本尊も教義も分かれるようです。

例えば、仏典においては、法華経が最高であり、釈尊の本懐であることはほぼ仏教界の定説ですが、いざ本尊ということになると、八宗十宗に分れてまちまちになってしまっています。

法華経を依経とした伝教大師最澄が比叡山に天台法華宗を立てましたが、摩訶止観の四種の修行によって、釈迦仏の外、阿彌陀・薬師・観音など種々の本尊が立てられます。法華経の開会の上に真言密教や念仏・禅等を用いますから、後に法然・親鸞や栄西・道元等が、それぞれ天台宗の教義から取捨選択して、一派を立てて分立して行くのであります。つまり、法華経が最

高とわかっていながら、実際には本尊も信仰もいろいろに分れて来たのであります。

もともと日本仏教は法華経を中心に展開してきたのですが、鎌倉時代に入ると、念・禅・戒・密が盛んになって、次第に法華経が中心的な位置からはずれてくる傾向があったようです。

このような、大乘仏教の正統からはずれて法華経を軽視した諸宗のあり方や、雑修雑行的、天台宗の法華信仰に対し、大聖人は強い疑問を感じられたようです。そして末法という時になった法華経の本尊はいかにあるべきかを追求され、法華経を身をもって実践された宗教体験の中から三大秘法の本尊を顕わされたのであります。

《身延離山と門流の分立》

しかし、よく質問されることは、大聖人ご入滅後、門下がい

ろいろに分かれてしまったことです。大聖人ご入滅後すぐ老僧の間に教義解釈の違いが生まれ、日興上人は「いづくにても、聖人の御義を相次ぎまいらせて、世に立て候わん事こそ詮にて候へ」と、身延山を離山されます。

この事件は世間的に見ますと、日興上人が分派行動に走ったように見られますが、けして分派することが本意ではなく、むしろ「本意なき、面目なき」とも述べられておりますように、不本意な事件でした。しかし大聖人を天台宗の余流とする他の老僧方の影響から、正法正義を厳守するためにはやむなき行動であったわけです。

また、現在から見れば、むしろ、日興上人のこの時の行動によって、かえって後世に、大聖人の仏法が本門に立脚するもの



日興上人の御正墓

であることを示す契機になったともいえます。他の老僧方の立てられた法義からは、とうてい大聖人独自の法門は出てこないのではありません。

《後世の門流分立》

また、京都に行きますと十六箇本山といひまして、日蓮門下の各門流がいろいろに分立しています。各門派それぞれに教義や本尊が違っており、門下が四分五裂して自家の伝統を競って

いる状況です。

日蓮系各派が分裂する要因は、国家権力や世俗社会と教義・信仰の関係という問題もあげられます。

例えば江戸幕府は、士農工商という階級制度を設けて民衆を支配しました。この封建社会というものは、神仏の権威よりも將軍の権力のほうが絶対であって、民衆は將軍様のご慈悲によって、この社会で生きる事が許されるし、信心もすることができるといふ建前でありたっております。

そうすると幕府としては、人間は皆仏性を備えており、本来衆生はみな平等であるという仏性思想や、將軍等の世俗権力は、仏法にくらべると仮りそめのものでしかないという仏法優位の思想などが広がっては、民衆を支配し続けることはできません。さらには、農民等が身分制度に疑問を持ちたりしたら困りますから、現世の姿は全部過去世からの運命として諦め、納得させるような宗教が望ましいのです。これは戦前がそうであったように、いつの時代でも、権力者は民衆統治のため宗教を利用するのであります。

徳川家康も、農民に浄土宗を押し広める政策を採りました。浄土宗の教えは、自分がこの世に貧しい農民として生まれたのは、過去世の自分の行いが悪かったからであり、因縁として諦めて、念仏を唱えて死んだら来世は極楽浄土に行けるという、現世への諦観がありますから、従順な農民や町民を作るのには、実に有効だったのです。

その点、支配者からすれば、どんどん太鼓を叩いて折伏し、現世を变革して理想世界たる仏国土を建設するなどという日蓮

信仰ほど、危険な宗教は他にありません。

そのために日蓮門下は幕府からたびたび弾圧を受けることになりませんが、そうした状況下では必ず、妥協して弾圧を回避しようというグループと、弾圧に抵抗して教義に殉じようという人々が出てきます。不受不施派などがその典型的な例ですが、しかし、穏健派も教義を歪曲することによって異義が噴出するし、強硬派もそのスタンスの違いによって次々に分裂するのがあります。

えてして教義や信仰よりも現実（生活）を重視するグループが多数派となって残りますから、お題目は変わらなくとも、その内実は無原則となります。

実際、稲荷信仰やら、鬼子母神、帝釈天、七面山、妙見、龍神信仰など、民衆の御利益願望に応じてあらゆる本尊を祭り、持の神とか虫封じ、荒行・水行やら加持祈祷、呪文・護符・木剣、神仏をこちゃませの雑乱信仰になり、法華経や大聖人の教義とは全く無縁のものになってしまっているのです。

彼らはご本尊中にある鬼子母神や帝釈天を別勧請しているのだから、お題目さえ唱えていれば方便として構わないというような論法（——学会の選挙の際の題目闘争と同じような論法ですが）を用いて正当化するのですが、それなら本尊は阿弥陀さんでも何でも良いことになってしまふ。帝釈天は天部ですから、帝釈より阿弥陀の方がましという事にもなりません。——総別を知らない、全くこじつけの考えです。

現在の日蓮宗は、教団維持とか寺院経営など、生活優先の利益誘導型の連合体ですから、現にある邪義や悪習をすべて現状

肯定して認めてやっていかざるを得ないので。そのため同じ宗派でも本尊すら統一できません。

一方、日興門流では、不幸にも鎌倉幕府滅亡期に日興上人・日目上人の遷化にあい、南条時光等の逝去や南北朝の混乱もあって、檀越の分裂と争乱の中で正嫡をめぐる富士五山がそれぞれ分立するようになりました。さらに京都に出た日尊門流などは、やがて他門の影響を受けて造仏容認派となり、世俗化するようです。

しかしながら、富士門流には大石寺・本門寺・妙本寺等を中心にして終始一貫して大聖人を本因妙教主・主師親三徳・本門大導師と拜する遺風が伝わり、大聖人の顕された曼荼羅本尊のみこそ衆生成仏の唯一の要法としてきました。

もちろん富士門流にも強大な国家権力を前に、国家の圧政に従わざるを得ない状況が何回かあり、その都度それぞれの内部での葛藤があります。

しかし「身をば随い奉るようなれども心をば随い奉らず」でいつの時代でも大聖人・ご開山の門弟の誇りとともに、仏法為本・信心為本の精神が伝えられ、教団は小さく貧しくとも、広宣布という大きな理想と気概を持ち続け、積極的に時流に阿諛迎合するようなことは余りなかった事も確かです。

大石寺をはじめとする富士の教団にはその根本精神において、時代の権力に迎合したり時流に流されることなく、何としても大聖人の正法を、衆生成道の正義を未来永劫に伝えなければならぬという、富士日興上人の魂が脈々と流れていたと思うのです。しかし、現在の北山本門寺は、戦時中の国策による身延

派の合同によって、日蓮宗と一体となったため、富士門流の legalization を習い失って、その伝統継承に大きな断絶が生じつつあるようです。その他の本山も本末解体で著しく疲弊しているのが実状です。

《日蓮正宗の分裂と低迷》

大石寺門流は、戦時中の種々の圧力に屈せず自主独立を貫いて大聖人の正法正義を守ってきましたが、戦後の創価学会の出現で教団が組織的・経済的に急激に膨張をする過程において、途中から雲行きがおかしくなり、今ではご覧の通り正信会、阿部宗門、創価学会、顕正会（旧妙信講）、それに幾多の離脱寺院とに分裂してしまいました。

考えてみますと、一般に分裂ということは私の強い中心者が、強引なやり方によって間違ったことを行い、法義や道理を無視して周りの諫めも聞かず、権力をもってゴリ押ししようとすることから、気骨のある者が反発して分裂が生じるようです。

たとえ法主とか管長でも、法とか正義には随従しなければならぬはずが、権力に奢ると、自分が「法」になってしまい、自己防衛や利権・体面等を優先するようになります。

特に教団が経済的に発展して多くの利権の構造が生まれると、いつしか既得権を守ろうとして、教団・寺院の私物化がおこり、墮落していく。また、そうした教団の体質や教義を改革しようとする者を、必ず抑圧しにかかるのです。

大石寺も小教団で貧しい間は、まだ貫首から小僧に至るまで「ご開山上人」の弟子としてご遺誠に忠実であろうとする気風が流れていたのですが、いまは宗開両祖より、眼前の法主の権

勢に怖れをなしてひれ伏してしまうのです。結局、教義も本尊も皮相的にとらえ、唯物的となり、歪曲されていきます。

創価学会という組織は実際には池田大作が本尊ですが、いまは大石寺も似たようなものです。阿部法主を戒壇本尊と一体不二の尊体などと吹聴し、否むしろ、俗的に見れば「戒壇本尊を所有する者」「唯一本尊を書写できる者」として、むしろ本尊より上位に見る傾向すらあって、衆生の成仏をも左右する絶対者として君臨しております。

《法華経の題目をもって本尊とすべし》

今の宗門の四分五裂の状態も、やはり本尊観の相違が根底にあります。阿部宗門の本尊観は、個々の僧俗が受持する信心の中身を検証せず、ご開扉を受けて戒壇本尊（板本尊）を拜めるかどうか——ということとは阿部師に服従するかどうかというような世俗の話になっております。

大聖人の本尊についてのお考えは、御本尊は単なる物ではないのでして、それは、本抄において、

「此の御本尊全く余所に求る事なかれ。只我れ等衆生の法華経を持って、南無妙法蓮華経と唱ふる胸中の肉団におはしますなり。……此の御本尊も只信心の二字にをさまれり。」

（全集一二四四頁）

と述べられている通りで、正本堂の戒壇本尊を呪物的に御利益付与本尊のようにとらえるのは大間違いなのであります。

今のように戒壇本尊を直接拝する信仰は、近代、特に学会以降におこったことで、本来の大石寺法門からいけば、広宣流布の暁まで客殿の奥深く御宝蔵に秘蔵すべきもの、それまでは軽

々に拝すべき本尊ではないのです。大石寺の寺号さえ仮称なのですから。広布の時を待って七百年秘蔵してきたものを、広布が実現してもいけないのに、実体としては本堂の本尊として祭ってしまっただけです。自ずと法門に狂いが生じて来ます。

本来は、寺院・自宅等に御安置する本尊を生身の大聖人・本門事の一念三千、義の戒壇の本尊として拝するのであって、事の戒壇というのは未来成就の、乃至三世を超過した仏国土に建立される本因の本尊という意義を含むのであり、文字通り行者の信心修行によって成就する内証の本尊という深い意義がこめられているのであります。

本因が家の本果にたてられた、現時における戒壇は本山はじめ寺院・家庭それぞれ御本尊を安置する場であって、それぞれ自分の生きる場を即是道場として修行に励み、広宣流布をめざす事を忘れてはならないのです。ご開扉を受けに登山することが重要なのではなく、いずこの地であれ宗開兩祖の御義を守って自行化他の信心に励むことが重要なのです。

いまの宗門が国立戒壇問題などに見られるように、ご都合主義的に教義をかえて来たことは周知の事実です。しかも阿部師はその当事者として何らの反省もなく、いまだにご開扉を武器にして批判者を抑圧し、自己正当化を図っているのです。行く重にもタブーを設けて、議論を封じ、仏法の私物化・専制化を計っているといっても過言でありませぬ。

しかし大聖人は、正しい信心の中に本尊は在おほしますことを明確に仰っているのですから、登山して戒壇の御本尊を拝まないと地獄に墮ちる、などという本尊観とは次元が違います。

大聖人が曼荼羅に認められた十界の相貌は、法華経の虚空会の儀式をかりたものという事になっております。それは大聖人が上行菩薩として、虚空会の儀式に連なって、教主釈尊から三大秘法を付嘱され、末法に広宣流布することを面授口決された化儀を表わしております。（さらに深い意義もありますが）

そこで、大聖人は末法に出現されて、南無妙法蓮華経の題目を一切衆生に弘通されるのですが、それを本文中に「日蓮いかなる不思議にてや候らん。」と述べられ、そして、

「末法二百余年の比、はじめて法華弘通のはたじるとして顕はし奉るなり。」（全集一二四三）

と、述べられているのであります。

虚空会にて南無妙法蓮華経を面授口決されたという事は、これはもともと歴史的な事実というのではなく、現実を超越した大聖人のご内証の中のことなのです。

釈尊に直接会ったということが現実社会の歴史的事実であるはずがないのです。これは大聖人が法華経を色読されて、その中で自身の久遠の使命と深い因縁を悟られて、末法の大導師としてのご自覚をもって三大秘法の本尊を立てられたのであります。その話は世俗の社会的な出来事でもなく、歴史的な事実でもない。法華経の信仰を通じてのみ、時空を超越して、直ちに教主釈尊に相見まえるという感得の世界であります。結局のところ、我われが御本尊を拝して、朝夕大聖人に見まえるという、信心をもって感得していく感応道交・境智冥合の世界なのであります。その師弟不二の世界を本尊として顕まわされたのであります。ただ肉眼でとらえる五識の世界におわるものではありません。

このことは唯物論者からみれば、それはまったく観念論だというに違いありません。しかし大聖人は、

「観念すでに勝る故に、大難又色まさる。」（全九九八頁）
 とか「観心本尊」といわれるように、文字通り仏法は凡夫見から仏の見方へ―仏知見を確立していくことを成仏というのです。寿命品の中では「一心欲見仏 不自信身命」と説かれていますが、何も御本尊を穴のあくほど見つめることではない、仏法のため身命を惜しまないこと、本仏常住を信ずること……それがすなわち見仏ということです。

《御本尊とはただ信心の二字におさまれり》

「本尊問答抄」では「法華經の題目を以て本尊とすべし。」といわれ、一方「撰時抄」「報恩抄」等では本門の本尊・本門の戒壇・本門の題目と三秘の名目をあげておられますが、その本尊を法華經の行者の内証に約せば「観心本尊抄」等に、

「我らが己心の釈尊は五百塵点乃至所顯の三身にして無始の古仏なり……上行・無逆行・淨行・安立行等は、我等が己心の菩薩なり」（全集二四六頁）

といて、御本尊に認められている十界の一々は皆法華經の行者の己心の仏界や菩薩界を表わし、また己心の声聞や縁覺、さらに修羅界等を表わしていると記されています。

ですから、本当の法華經の法門が生きて現れるということとは、法華經の行者として色読され、骨肉としてそれを読まれることによるのです。次に、

「妙覺の釈尊は我らが血肉なり因果の功德は骨髓に非ずや」（全集二四六頁）

とあって、故に「御義口伝」に

「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」（全七六〇頁）とありますが、南無妙法蓮華經という仏法（本尊）は法華經を受持して行じているその姿が本尊なのであるということですが。

本尊はただ外在的に彼岸に存在するものではなく、また自身に内在する者でもありません。南無妙法蓮華經を信じて受持することによって、本仏の寿命と境智冥合するところに本尊の相貌が現れるのであります。これを本宗では日蓮・日興の血脈として表すのであります。

もし仮に御本尊を彼岸にのみ拝することになれば、念仏の阿弥陀仏に対する信仰と同じで、我われは罪多き衆生で、いつまでも仏様になれないこととなります。またキリスト教という神とキリストと人間の関係と同じことで、人間は常にキリストを仲介者として神に救ってもらおう哀れな存在ということになります。絶対者（仏）とその代理人と衆生という差別された関係は今の宗門教学と同様です。

法華經にはっきりと「如我等無異」（方便品）と説かれ、仏も我われも等しく仏になるのでなければ嘘ですよ、と仏様が衆生に呼びかけているのとは随分違います。仏様の本当の願いは衆生済度であり、すべての衆生を自分と同じ境界にしたいというのが、仏様の願いであることは、自我偈の終りにもある通りであります。

ですから、法門のあり方からして、当然凡夫が法華經の信心修行によって成仏し、我われ自身も妙法蓮華經（ご本尊）の当体となるというところに究極の慈悲があると思えます。

勿論、現実には煩惱の多い三毒強盛の身ですから、そのまま我われが本尊といえどもでもないこととなります。仏様の証得されたこの妙法蓮華經を一心に信受し、法のためには身命をなげうっていくように、と厳しく誠められているところであります。しかし、信の一字をもってみれば我われ凡夫も南無妙法蓮華經の当体であるということは、少しも疑いの無い事実なのであります。本文中の「この御本尊全く余所に求むる事なかれ」との仰せにもかわらず、余所にばかり求めるといふ、同じ過ちを犯しているのが創価学会であり、阿部宗門であります。

我われは、仮に登山して戒壇本尊のご開扉を受けられずとも、法華經神力品の「在々所々」の文、また「原殿御返事」の遺誠に照らせば、街の中、山の中、家庭、病室、どこでも大聖人・日興上人の教え通りやっていくところが御本尊のお住まいになる所だ、南無妙法蓮華經を信じて唱える所に本尊が本仏がお住まいになるんだという事を、よくよく肝に銘じたいものです。そういう根本の精神が理解ができていけば、我われは少しも迷うことはないであります。また、少なくとも、知らず知らずのうちに曲げてきたことを清算して、大聖人や日興上人の精神に基づいた立派な教団に変わらないう限り、今の大石寺には大聖人の御魂は住んでいない、と断言するものであります。

《宗旨建立以来不変の法一箇の大御本尊》

大聖人の仏法は、法が先ず優先しており、法華經の法体の題目を本尊とするのでありますが、またそのお題目を正しく修行される方が御本仏であります。ここに法本尊と人本尊の二つの概念が表されます。本文中の、「一念三千即自受用身、自受用

身者出尊形仏」とあって、人即法の本尊は尊形を出たる仏ということになります。事実曼荼羅に法一箇の姿として「南無妙法蓮華經 日蓮」と認められておりますが、大聖人が法華經を身口意の三業に受持される姿、「法華聖人」と日興上人が拝した宗祖のご内証、それを直ちに我われも拝しているのです。しかも、その御本尊は、

「是こゝろ全く日蓮こゝろが自作にあらず。」（全集二二四三頁）

と、日蓮が書いたものではなく、この法界に周遍する妙法蓮華經、すなわち因果の理法を一幅の曼陀羅に顕したものである、とはっきり申されているのです。仏法は単なる觀念論ではありません。現実に生きた人間の振る舞いの中に表されるものですから、それを人本尊として法華經の行者の一身の当体をもって本尊とする、といわれるのであります。

このことについては、日興上人や日有上人、また日寛上人のお書きになったものを見ても分かりますように、日蓮正宗は終始一貫して、人本尊・法本尊については何の混乱もなかったのであります。

いま、宗門や学会の混乱もここまでくれば、いよいよ先が見えてきたようであります。我われはこの運動の過程の中から多くのことを学ばせて貰ったのですから、今後も大聖人の眞精神を受け継げるよう精進していかなくてはならないと思ひます。

私の願ひは、今後何年かかるかわかりませんが、地道に信行学に励み、富士の清流を、皆様ともども世にきっちり立て直していききたいということであります。どうか、ますますのご精進をお願いいたします。 南無妙法蓮華經

(了)

窓の外に目をやれば、強い日差しが眼を射ぬき、セミの鳴き音は、轟音となつて、耳に飛び込み、脳を突き破る。本堂では内陣が本陣となり、南北いり乱れて、セミの空中戦が展開される。

(ああ、これが蟬時雨か)と、呆然とするうち、電話の呼び出し音が遠く鳴る。

「モスモス、タガハスクンズロのトバ願います」「えっ?……、高橋ケンジロさんの塔婆ですか?」

天地つかの間

〔その二十一〕

成田 詳道

お盆で秋田のお寺へ、手伝いに行った時の出来事である。何度も聞き返す私と、あきらかにイラついた相手とで、電話をはさみ双方ともに、困惑しきつてるところへ、住職さんがお盆経から帰ってきた。

方言とか訛りには、人の温もりや素直なお可笑しみが秘められている。これを、我れ一人賢しと、理解するための忍耐と、努力を惜しめば、その良さや人情に、出会う

ことはできない。

先頃、継命新聞に掲載された「日目上人編集記」のレポートで、「めみみのこ」の語句が解明されていた。重複はさけるが「ワカメの茎にできる胞子囊で、耳の様な形をした厚いメカブの粉」の意味で、生姜と酢で和えると腹痛の予防薬となるそうだ。古い書き物には、とうてい理解も想像も



幼年時代の賢治と妹トシ

及ばない語句や、名前に出くわす。おかしな先入観があると、もうとても真実には近づけない。方言や訛りと一緒に、素直に聞く耳をもち、地道に一つ一つを、丹念に調べ上げねばならない。横着は禁物である。

レポートは淡々と書かれていたが、そこにいたる経過は、並大抵ではなかったと想

像する。手元にある、佐渡の方言集には、キノコの総称を「みみ」とあった。ワカメの茎に小さなキノコが付いた形を連想し、子供のころ海辺で、海藻を投げ遊んだことが浮かび、より一層理解ができた。

日興上人のご消息にも、カチメや鶏冠海苔など、いろいろな海藻のご供養がでてくる。方言集では「テンツメシ」「カチメメシ」などの名がある。海藻のテンツ(ひょうだわら)を天日で干し、臼で搗いて粉にし、飯に混ぜたり、カチメを二、三度茹でたのち、飯に炊き込むとあった。意味不明の言葉や、語句がわかった時の喜びは、格別である。

宮沢賢治の詩集に、妹のトシが、高熱の病床から「あめゆじゅとてちてけんじゃ」(雨雪とつてきて下さい)といった言葉がある。

私はこれを、なんでもない時に、おまじないのように、二度三度と繰り返すことがある。別になんということはない、ただ心が温かくなるのだ。お題目でないところが、少々情けなくはあるが。

あつ、それから冒頭の名前の件ですが、高橋金次郎さんなんですつて。

(源立寺執事)

私 日 蓮 観

聞き手 不二翁・延峯

六月七日、小歌みなき、五月雨冒しつづ、泥濘を履みて都門を出でつ。模糊として薄紗に書かれたらんが如き、江東寺島村に、往年跌宕奇警の文章、小説界を震撼せしめし文壇の雄将、幸田露伴氏を、新緑滴る所に訪う。刺を通じて来意を述べれば、やがて此方へとて氏が書齋に導かれぬ。清楚なる十畳の座敷、余念なく書見に耽れりし、高頂円類、炯々たる眼光の一士、人は、これ露伴成行氏なり。氏は快くその談話を諾されぬ。

ハイ、左様です。私は日蓮宗徒です。しかし、宗義及び宗門のすべてのことに就きましては、まだ深くは研究致しません。尤も高祖遺文は、先年拝見しました。

そうですね、高祖の性格とでもいうものを断じたなら、どうもその様子が常識

を離れておるのですな。まず大いなる馬鹿か、常識を超出した偉人なのか、その一挙一動、みな世智と背反して、殆んど智識の無いものの様であるですな。時世と共に醉生夢死してしまう人間は兎も角、普通いくらか人に卓れた智識のあるものなら、その時勢と自分との秤量をとつて、自分の生活の根底ともいうべき、時勢を利用して、さて自分の目的なり、理想なりを漸次行うような道筋をとつて行くので、それが即ち世智で、この時勢洞観的智識のないものは、その目的を達し得ずして、竟には失敗の暗黒裡に埋められてしまうのです。

しかるに、これを高祖に見ますると、この世智が欠乏して居るですな。かの念仏全盛、真言繁盛の時代に、立宗の当時より、池上入滅に至る約三十年の間、好

んで、所謂四箇格言なるものを振り廻して、或いはこれを公衆に訴え、或いは之を政府に迫り、時に筆にし、時に口にして、旧仏教諸宗を排滅すべく、我が所弘の本門法華の尊重すべきを説いて、極端の強折厳詞をなされたが、その憤激痛罵の態度のすさまじきは、かの安房の擯出、竜口の類の座、伊豆佐渡の流罪、名越小松原の厄難等、無数の災厄を報酬に得るのは当然の始末であるですな。高祖在世にあつて、一般の人がこれを信じ得なかつたのも素よりです。

所謂、伊東の御法難を迫り出だしたかの立正安国論の如きもそうです。あの様な政府へ、あの様な、書物を進献して、その納れられん事を求めるのは、殆んど智者を俟って、その成らざるを知らんやで、北条氏の様な、民政に意を用うる政

府、而も人心を籠絡するに汲々たる陪臣政府は、かの論の天下の施を絶つて悪侶を誡めるなどと、いう様なことをして、宗教的騒亂を甘んじて受け得ぬことは明々たる訳であるです。

しかも、高祖はこの畢竟成るべからざる手段を採られたのみならず、これを強いられたですな。これ外国の事情と時勢の如何を顧みずして、徒らに自己の希望のみを要求する、智識なき人の如くである。若し智識ある人で、結局、政府に干むる処あるか、時勢に我が宗義を弘めんとするには、アンナなるべからざる極端な手段より外に、方法はいくらもあつたらうと考えられるですな。

しかし高祖の遺文に視、その伝に見るに、高識才弁、決して大愚の人無智識の人では勿論ない。またさればとて、好んで世に背き、上に悖る世には恨振の人もありますが、高祖の時に、温然たる風貌を遺文に伝えらるるより見れば亦これでもないですな。

凡そ宗教や哲学や、文学美術の如き、靈心に関したる事に当たる人は、政治や、実業の如き現世的事柄とは異なつて、多

少みな理想に属して居る。随つて、理想をもつて、この世の中を救い導いて行くのが天職である。ことに宗教の如きは然りで、弘教者の理想というものは、この塵垢の世を焼き尽くして居ねばならんですな。高祖は実にこの点においては一分の俗智を含まれて居ない。その理想を主張せらるるに、熱心で、豪壯で、堅実で、世間というものは、高祖の前には、殆んど無勢力なるが如く、一生これ主義の活動、即ち、高祖は俗智には不忠実であつたが、理想には忠実であつたのです。弘法大師や、伝教大師の如きは、高祖に比較すると、稍俗智が手伝つて居る様であるです。私は、この点において、尤も高祖の人格を敬慕するです。

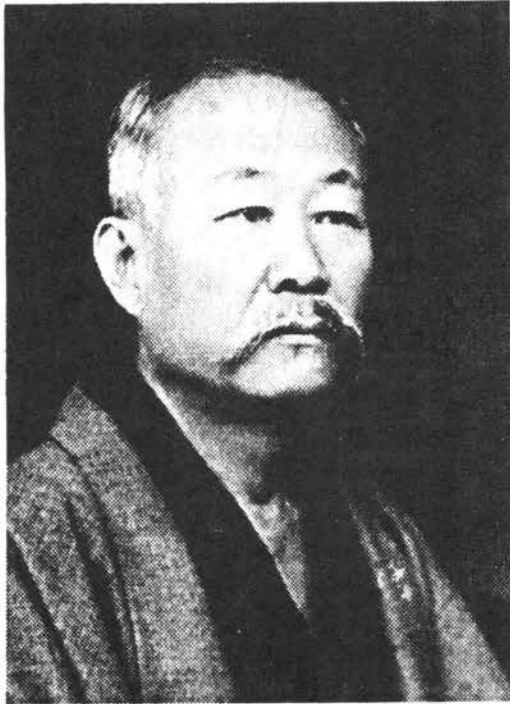
また高祖のような剛毅堅忍にして、意志の遂行に勇猛なる、あの調子の性質は、あの頃迄の日本人には、希有の事で、惟うに、源平時代の勇猛なる武人の集まり出た時世の反響であろうと考えます。為朝の如きもその種類で…。

〔問〕世に上人をもつて、政治家的宗教家となすものあるも、子が考は奈何。

高祖をもつて、政治家的というものは、私は全然考えられません。政治家というものは、よく時勢の機先を制してその効を収めるのですが、高祖は世智がすでに欠乏せるが如く見えるのでありますから、それは私は肯はれませぬね。政治家趣味があらば、もつと巧手に遣られるです。

もしそれ高祖の文に至つては、実に鎌倉文学の偉観です。あの時代の高僧は法然でも親鸞でも、みな一種の仮名文を善くしましたが、奔放雄抜、得て模すべからざるは高祖の文です。どうも国学者の書いた和文などには、ろくなものはないですな。いやにぐにやぐにやして私の考には国文家の名文と崇拜する源氏物語などは、冗漫極まつた千古の悪文ですな。その処へゆくと仮名文の善いのは仏教家の手に多いですな。

お経でも維摩や法華などは、文章としても、真に天下の妙文、翻訳文の上乗ですな。高祖が広を好むと仰つた玄奘の大般若経に至つては、源氏物語の流儀で、同じ様な文句許りが続出して来るので、殆んど嫌厭を催するです。また、我が国



幸田露伴

歌念仏などという内に種々の調子があるのは皆その例でしょう。

〔問〕現時我邦社会の溷濁

のかの神社仏閣の縁起というものには、意外に興味ある価値ある文字も見得るです。いづれ皆古への高僧名僧の手に成ったのでしようが、俚神話の如きものを見るです。古事記・風土記以外には、これ日本文学史上、容易に看過すべからざる点であるです。私は洽なく全国の名社古刹の縁起を蒐集せんと数年来希望して居るです。

どうも国学者などというものは、これまでは仏教のことという、余り重きを置きませんから、今迄文学史上に縁起類を逸して居ますが中古以来の一般日本人

の想像力、及び文学趣味は正しくここにその形跡を残して居るのです。かの所謂中古の日記物語のたぐいは、いわば一部殿上文学であるというて宜しいでしょう。また詩形についても、擬古的の長歌を除いては、すべて中古以来三十一文字に踰踏したのですが、その頃の新体詩とでもいふべきはかの和讃のたぐいでしよう。たくみに漢語和語をとりまぜたる、今日の新体詩の親だといつても恥ずかしくはありますまい。またその調子の如きも中々面白いです。和讃のみならず古来の神仏の歌の調、または題目念仏などの節調にも、今だに山辺は山辺、海辺は海辺と種々の形式が残つて、往昔その教徒等がいかに愉快に、これを唱え、或いは謳いつつ安心を策励したかが想像し得られるのです。かの歌題目、歌念仏などという内に種々の調子があるのは皆その例でしょう。

を一掃すべき宗教の改革者、弘通者の資格に就いて、如何なる特点を望まるか。それは今日の進歩した諸学問、及び諸宗教教理に通すべきは当然ですが、必確然たる信仰が第一です。常に時代に依つて変遷する学問思想に証明せられて初めて得々たる様な信仰では駄目で、世智俗智に動かされず、清く高く時代よりは數十層上なる理想を蓄え、胸裡にその理想的教主の姿の様なものがあつて、その教主の如く身を処する人、要するに時代を挙げて自己の理想境に引き上げる位の、大信仰と大勇猛心が尤も必要でありましよう。

以前『恵日』誌上にも取り上げた幸田露伴が、雑誌のインタビューに答える形で、自らの日蓮親を語っている貴重な記事がありましたので、転載し紹介します。

明治期のものであるため、かなり難しい字句もありますが、あえてそのまま掲載します。(編集室)

創価学会関係の書籍は、内容が引用ばかりで安直なものも多く、はっきりいって食傷気味の感があるが、久しぶりに全編自らの足で取材して歩いた労作に出会った。筆者が、月刊『宝石』に連載していたものを一冊にまとめたものだが、この本は現在の学会の一面を知るためには必読の好著といえるだろう。

洗脳されている学会員を目覚めさせるために、本人や周囲の人にこの本を読んでもらえば、信心の次元はともかく、まず目が覚めるような気がする。

本書の内容は、第一章 「金脈」、第二章 聖都・八王子、第三章 墓園ビジネス、第四章 〈財務〉、第五章 「人脈」、第六章 聖教新聞、第七章 「国父」になる日、第八章 母一の懊惱、第九章 野望の原点、第十章 章資金集め、第十一章 出世術、第十二章 「現在」の十二章で、それぞれが興味深い内容となっているが、その一部を抜粋して紹介すると、

「第三章 墓苑ビジネス」『仙台市は隣の泉市を吸収合併して（八八年三月）、念願の政令指定都市になりました。（八九年四月）話はこの合併の少し前のこと

になります。泉市長（鈴木幸治）も公明党も仙台市との合併に強く反対していません。しかし、泉市長は八七年五月、五期めに入ってから保守系へと身を移し、



野田峰 雄 著
『池田大作 金脈の研究』
三一書房 二二二〇円

公明党も突然、合併賛成派へクラ替えしてしまったのです。まさに突然のことでした。公明党の場合、原因は自民党の三塚博と池田大作の会談にありました。そ

の場で、池田は合併賛成へまわる条件として蔵王の墓苑開発の許可をもち出しました。要するに、金儲けと政治信条を平気で交換してしまっただけです。一夜にしてひっくり返ってしまった政治の産物が東北池田記念墓地公園なのです」
これは当時の事情をよく知っている泉市議の一人が直接、私に話したことだ、と元学会幹部はつけ加えた。

そういえば、白石の政治関係者が「開発許可は県よりずっと上のほうからおりてきた」といつていたことを思い出す。

池田との会談で三塚もまた新利権を得たということだが、それについては本筋から外れてしまうのでひとまずおく。とにかく池田と三塚の約束はほとんど実行に移された。前述したように創価学会が開発申請書を八七年九月、宮城県へ提出するや、場所が蔵王国定公園のエリア内にもかかわらず一か月半で許可を受けることができ—ついに、少なくとも数億円の金を握ることに成功したのだ。』
等と、具体的に創価学会の汚いやり口を取り上げて紹介しているが、学会の裏の実体を知る上での格好の材料といえよう。

「弟子分帳」と十七回忌「十八」

松田 銘道

亦、「申状」と「立正安国論」の副進

五人の本弟子方が住房破却の難を免れたとされる申状には、日興上人が「弟子分帳」にて指摘された、

a、聖人の御姓名を改めて、天台の弟子と号した。

b、天台宗を行じ、御祈祷をした。

との内容が記されていました。

問題となる申状は、「弟子分帳」述作

以前の申状で、前回図示した申状一覧の

①②及び⑥の三通がそれに該当します。

①②と⑥の間には六年の歳月が流れていますが、それについては内容の比較を通して考察することとし、まずaの問題について検討を加えてみます。

①では、

「天台沙門 日昭謹言上」

②では、

「天台沙門 日朗謹言上」

⑥では、

「天台法華宗沙門 日頂謹言上」

となっていて、⑥の表記が少し違っているもの、ともに「天台沙門」と名乗っていたことが知れます。

aの天台沙門の名乗りについては、日興上人が「聖人の御姓名を改め」と記されていることからして、天台沙門との名乗りそのものが、すでに大聖人の教えを天台の教えに貶めていたのではと、思います。

この指摘は①において、

「先師日蓮 忝も法華の行者と為して、専ら仏果の直道を顕し、天台の余流を酌で地慮の研精を尽す」

と、「天台の余流」を継承した日蓮との

立場を主張し、また②においても、

「先師日蓮如来の本意に任せ、先判の権教を閣て後判の実経を弘通せしむ。最要未だ上聞に達せず」

と、権実相対での実経を弘通する日蓮との立場を主張し、さらに⑥でも、

「桓武聖代の古風を扇ぎ、伝教大師の余流を汲み立正安国論に准じて法華一乗を崇められんと請う」

と、「法華一乗」の教えを弘めるとの立場を主張していますが、日興上人の記述はそれらへの批判であると思います。

三つの申状に共通するのは、大聖人の弟子との名乗りを捨てたのみならず、大聖人の教えそのものを天台と同に貶めているという点です。aでの日興上人の指摘はこのことも含まれていたはずですが、すなわち、①②と⑥に共通する大聖人

の捉え方は、天台余流の法華經の行者日蓮となつていて、天台との間に何ら勝劣が示されていません。それに対して④において、

「抑も伝教大師弘むる所の法華は猶以て述門也。先師聖人弘むる所の法華は併ら以て本門也」

との主張がされています。

日興上人は伝教大師（天台宗）と大聖人とは、同じく法華經を弘める立場であつても、述門と本門との違い、勝劣がそこにはあるのだとの見解を示し対応されています。

このことから、日興上人は①②および⑥で台当の違目となる本迹勝劣が記されていないことをして、aにおいて「聖人の御姓名を改めた」との指摘もされていたのだと思います。

aでは今まで「天台沙門との名乗り」という面だけが問題視されてきた傾向がありました。そこには自ずと本迹勝劣という台当違目の問題も一緒に含まれていて、それが姓名の改変への指摘ではないのか、そう思います。

それゆえに日興上人は、aの指摘をさ

れた後にbの「天台宗を行じ、御祈禱を致」したとの問題を取り上げられ、その原因が「住坊を破却されんと欲するの刻み」への対応策から生じているとの指摘をされているのだと思います。

日蓮聖人弟子日興重言上

早對治念前迹門謗法被立法華本門正法

者可為天下恭平國土安人事

副進先師申狀等

一卷 立正安國論 文應元年勅文

一通 文永五年申狀

一通 同八年申狀

一 所造書籍等

右度、具言上畢抑對治謗法弘通正法治

國之秘術聖代之佳例也所謂漢土則隋皇

帝天台大師破十師邪義治亂國倭國亦桓

武天皇傳教大師止六宗之謗法退異賊凡

す

このことは、bの住坊破却の法難に對処する申狀の提出以前から、五人の本弟子方はaの立場を主張し、台当違目についてはずきりした態度を示さないまま天台の弟子として布教を展開していた可能性を示していると思います。

名乗りと安國論の副進に富士門流の特徴が…

以上のことから、aの「聖人の御姓名を改める」ということは、五人の本弟子方が滅後間もなくして本迹一致の法義を展開しはじめ、そこにbの「住坊破却の難」が生じてきたため、天台宗を行じたり国家安穩等の祈禱をも積極的に取り入れたりして、難を逃れる方策およびそのアピールとしていた、このように推測できます。

そこでbの問題について検討してみます。①では、

「日昭不肖の身為りと雖も兵戈永息の為、副將安全の為、法華の道場を構え長日の勤行を致し奉る」

と、戦乱の世が鎮まり、執権の安全を願う祈禱を行っていると主張しています。また②でも、

「然る間日朗かたけ忝かたじけなくも彼の一乗妙典を相伝してとじしな鎮ちんに国家を祈り奉る」

と、具体的な名目は示されていないものの、やはり国家安泰等の祈禱をしていることを主張しています。さらに⑥では、「法華道場に擬し、天長地久を祈て今に断絶無し」

と、「断絶無し」とまで強調して国家へ

の祈祷を続けていることを主張していません。

このように、三通とも国家安穩等の祈祷を行っていることを、わざわざ強調しています。また①と⑥では「法華道場」を構えていることも強調していますが、これも「住坊破却の難」を避けるための方策であり、アピールの一つではなかったかと思われます。

この祈祷の問題でも④とは大きな違いが見られます。④では、

イ、真言・念仏・禪・律等の諸宗を邪法と規定し、邪法を破却し正法の妙法蓮華経を崇敬して、天下泰平や異国降伏の祈祷を行うべきと訴えている。
ロ、邪法興行の僧徒との間で、邪正を糾明するために公的な場での問答を要求している。

ハ、邪法の興行によって「守護の諸天善神が国を避け」ていると、神天上の法門が明示されている。

ニ、怨敵の悪鬼が便りを得て、異賊襲い来て国を攻めるとの、他国侵逼難を予証されている。

以上の主張や内容と①②および⑥のそ

れとを対比したとき、同じく国土の安穩を祈るといつても、その目的も手段も明らかでないがあると思われます。

この違いを生むに至った原因が、aの大聖人から天台の弟子への後退であったといえましよう。そしてそれが諸宗との邪正の対決等も主張することなく、また他国侵逼難も訴えることなく、ただ幕府の祈祷要請を受け入れて、bの手段へと展開していく姿となつていったのだと思ひます。このことがまた、「立正安国論」への見解の違いともなつてあらわれています。

④以降の全ての申状において日興上人は「立正安国論」を副進されていますが、五人の本弟子方では①②では副進もなければ、それに触れることさえありませんでした。⑥の日頂師は副進していますが、④とでは「立正安国論」に対する取り扱ひが違つています。④において日興上人は、

イ、人々が邪法を崇めるために、守護の諸天善神は国を去り、悪鬼が便りを得ている。

ロ、「立正安国論」で予証された他国

侵逼難が今もなお蒙古の襲来に脅かされるという状況となつてあらわれている。

ハ、大聖人が諫曉された時の国乱と、現在はなんら変わることはない。

ニ、よつて幕府に諸宗と邪正との「御截断」を仰ぎたい。

以上のことが次の記述となつて示されています。

「この瑞相を鑑みて国土安全の為に去ぬる文応年中立正安国論を作り、上覧に備ふと雖も御截断を相待たずして聖人入滅し已る。今国体を見る併せて彼の勘文に符合す。争か之を賞せられざらんや」

日興上人が「立正安国論」の予証は現在まだ続いていて、蒙古の来襲となつてあらわれているとされたのは、大聖人の佐渡流罪までに発展した経緯があつただけに、日興上人もまたそうした法難を覚悟しての主張ではなかつたか、そのように思えます。

このことは、日興上人が副進した「立正安国論」に「文応元年の勘之(文)」と必ず注記されたことも関連している

と思います。

一方⑥の日頂師は、「立正安国論」を天台宗のなかに位置づけての副進となっており、文応元年との注記もそこには見られません。このことは⑬の日向師においても同じです。また⑥では、

「上奏に達せずして空しく円寂に帰す」

と、「立正安国論」での国家諫暁も幕府が用いることもなく大聖人は「円寂」された。それゆえ日頂が「法華道場」を構えて「天長地久」を「断絶無く」祈っているのだとの表明となっています。これは①で、

「先師正法恢弘の素意を遂げずして、他界せしめぬ」

と、正法を弘めることなく大聖人は「他界」された。それゆえ「法華道場」を構えて「兵戈永息の為、副将安全の為」に「長日の勤行」をするとした日昭師のそれと同じです。またこのことは②で、

「未だ上聞に達せず、愁鬱を懐いて空しく多年の星霜を送り、玉を含んで寂に入るが如く逝去せしめぬ」

と、多年の弘教も結局は上聞に達するこ

とができず大聖人は「逝去」された。ゆえに「一乗妙典」を相伝した日朗は「鎮に国家を祈る」のであるとしたそれとも同じです。

よって⑥においては「立正安国論」を副進してはいるものの、①②と同じく台当の違目も表明せず、また邪法の退治も訴えることなく、ただ天台の余流を強調したのものとなっています。このことは結びの次の一文により鮮明にあらわれています。

「天台の円宗を賞せられれば、金輪千輻の光四洲の空に耀き云々」

以上のことから、⑥では①②では見られない「立正安国論」の副進という④の形を取り入れてはいるものの、記された内容は①②と何ら変わることはないことが知れます。

①②では見られなかった⑥での「立正安国論」の副進という形式は、その理由の一つとして、「住坊破却の難」という幕府からの弾圧のピークが過ぎ去つていたと見ることもできそうです。

すなわち、①②では、住坊破却の難への対策として大聖人が晩年まで問題視し

続け、また幕府とも対立した「立正安国論」は一切触れない方が効を奏すると判断し、副進しなかったのだと思います。それが⑥で副進するようになったのは、弾圧が幾分ゆるんできていたとの状況の変化が影響していたのではないかと想像します。

しかし、日興上人が指摘されたaとbの問題は、①②での対策によって鎌倉の本弟子方の法義として定着していたのか、それより六年後の⑥に至っても何ら変わることなく踏襲されたままとなっていたことが、その内容から知れます。

①②および⑥での天台与同等の主張は、神天上法門への理解もまた④とは異なつた主張となつてあらわれてきます。

神天上法門については、日興上人と五人の本弟子との間で解釈が分かれ、その影響が信徒にまで及んでいたことが、「原殿御返事」によつて知れます。

この書状には、波木井実長氏の意を受けた南部弥三郎が、日興上人に質問してきたことの内容が記されています。質問は二つありました。

一つは念仏無間に関する問題で、もう

ちよつと寄り道 ⑳

新旧の交代

伯耆の里 もりたかんどろ

WINDOWS時代の到来は、パソコン教室でお世話になっているS商会にも、変化をもたらした。いままでサービ部門の中堅社員がパソコン担当に変わったのもその一つ、コンピュータ専門学校を出てコンピュータ会社に勤務していた女性が入社して入ってきたこともその一つである。彼女の登場が、私に引退を決意させた。

あとでわかったことだが、彼女とはおもしろい因縁がある。(以前書いたように)パソコンをはじめたばかりのころ、私はBASICSの講習をこのS商会で受けたことがある。そのとき、たまたま隣り合わせて何回かいっしょに受講した方

が彼女のお父さんであった(とあとでわかる)。それから数年たって、私が「一太郎」や「ロータス123」の講習をしていたら、そのお父さんが受講生としてまた通ってこられた。さらに数年後、彼女が入社、私のあとを継ぐことになる。

ところである日、社長から「じつは、県の婦人就業援助センターの正式な講習会場になったので、これを機会に新たなパソコンを二〇台導入してさらに本格的にやっていきたい。そして、簿記や会計ソフトの講習などもやっていきたい。スタッフも増員したので、お願いできないだろうか」という話があった。

すでに次々に新しくなるパソコン環境に、頭がついていけないという気がしていた私は、やってみたい気持ちも半分あったが、正直なところこれ以上手を広げたくない気持ちの方がつよかった。そして二人の新たなスタッフの顔を思い浮か

べて、老兵は去るのみ、あとは若い方々にお願しようと思った。数日後、五年半お世話になったS商会に辞意を伝えた。その後しばらくして、私の最後の講習があった。二〇台の真新しいウィンドウズマシンで、婦人就業援助センター主催のEXCELの講習を二十一日間(一〇五時間)のロングランでやった。私のあとを引き継ぐ二人も手伝ってくれた。期間といい内容といい、存分にできた。

BASIC時代のあとをついだ私は、まるまるMS-DOS時代を受け持ったことになる。そしてWINDOWSの最初の講習をして、その新旧の交代を見届けた。こうしてWINDOWSはマシンも講師も入れ替えた。

それから数年、そのときのスタッフはいまではむろんベテランインストラクター。ときどき教わったり教えたりの往来をしている。新旧交代は正解だった。



発行された『興風』

【新刊書紹介】

興風談所より

『興風』11号 — 日興上人研究特集号 —

を 刊 行

この度は、岡山興風談所より、表題の書籍が発行されましたので紹介します。この本は、興風談所より刊行されていた

論文集『興風』（創刊号〜第十号既刊）の日興上人研究特集号で、昨年の『日興上人全集』『日興上人御本尊集』の編纂、刊行に携わった各師がそれぞれの視点から日興上人の信仰・思想・事跡にアプローチしたものです。

掲載論文の内容を簡単に紹介すると、山上論文は、日興上人御筆本尊の脇書に記された計一四八名の弟子檀越の事跡を現在わかり得る範囲で調査報告したものです。坂井論文「重須本門寺と大石寺」は、一に従来の研究史をまとめ、二に富士門上

代の史料を駆使して重須・大石両寺の坊地・伽藍・講学・仏事等に言及しています。池田論文は、波木井文書に関する従来の諸説を疑問視して私見による系年を提示し、それによって日興上人の身延入山・在山時代を明示せんと試みています。

大谷論文は、日興上人筆「掛物」と、上人の行間注記を紹介し、その注記の意味を探るとともに、既刊遺文集の錯簡の可能性を指摘しています。大黒論文は、今回の『日興上人全集』に初めて収録された上人の要文・記録類の解題、また既刊書の読みを改めた箇所等重要と思われるところに解説を施しています。菅原論文は、『日興上人御本尊集』刊行後に行つた実地調査で新たに知り得た二幅の御筆本尊を紹介するとともに、日興上人の御筆本尊の特徴と門下の書写の継承を考察

- | | |
|---------------------------------|------|
| 日興上人御本尊脇書について…………… | 山上弘道 |
| 重須本門寺と大石寺…………… | 坂井法暉 |
| 無年号文書・波木井日円状の系年について…………… | 池田令道 |
| 北山本門寺蔵・日興上人筆「日興賜書写本掛物」について…………… | 大谷吾道 |
| 『日興上人全集』正篇編纂補遺…………… | 大黒喜道 |
| 日興上人本尊の拝考と『日興上人御本尊集』補足…………… | 菅原閑道 |
| 日興上人全集・日興上人御本尊集 正誤表…………… | |

しています。
なお、購入をご希望される方は、源立寺受付までお申し出下さい。頒価は、三五〇〇円となっています。

恵日だより



興味深そうに手に取って見る講員さん

宗旨建立会・お蟲払い

四月二十八日(月)午後一時

立宗七六四年の言祝ぎは、朝から雨のそぼ降る天候のなか、寂然と奉修された。あわせて挙行されたお蟲払いには、決して良い日和とはいえぬものの、二年ぶりということもあり、御宝前に数多奉掲された、歴代上人方の御本尊の前で、シキミをくわえた参拝者の面もちは、みな厳肅な気配で緊張していた。

お蟲払いは、お寺の重宝たる歴代上人のご本尊や、書簡など貴重な資料に、風入れし、虫干しする儀式である。しかし源立寺のそれは、他寺院とことなり、少々余禄がある。

というのも、ご住職が日頃から、留意し収集されている

古書籍の公開展示である。ご存じのように、収集した数多の教学書などは、興風談所に納めてあるが、この日も関連した資料や、古文書の一部が披露された。あまり知られていない話だが、歌舞伎では忠臣蔵と並んで、日蓮の物語が演じられ、この二つは上演すれば必ず、盛況大入りの二大演目だったそうである。そんなことから、版画にも多く刷られ、龍口法難の場面や、雪中の佐渡などが、ところせましとテーブルに並べられたが、あまり目にするのではない品々は、源立寺ならではのであった。

【訃報】

〔能勢町〕

徳壽院永正妙菊大姉 五月二日寂

俗名畑キクシ之霊 行年九十八歳

〔豊中市〕

本立院法義信士 五月十四日寂

俗名菊池義則之霊 行年五十八歳

謹んでご冥福をお祈りします

一泊研修会へのお誘い

九月初旬の一泊研修の申し込みにも、まだ余裕がありますのでご参加下さい。

「家族で参加したいが、土曜日は学校があるから」との声がありますので、要望が多ければ、子供さんが下校した後、午後からの出発グループも可能です。また土曜日のみ、日曜日のみ参加希望の声もあり、要望に応ずるよう検討中です。逐次ご相談下さい。

べ切を六月末日に延長しましたので、ふるってお申し込み下さい。

法華講住所録の作成

講員の方で住所、電話番号、名義等に変更がありましたら、名簿の変更をしますので、お寺か地区役員にご連絡下さい。名簿は、数年に一度改訂版を出しますが、今年も庶務係を中心とした有志の手で、新住所録ができあがりました。

この名簿はプライバシーを守るために、源立寺と幹事、役員にのみの配布ですが、もし、他の講員の住所、電話番号などを知りたい方は、その旨を地区役員に申し出てお聞き下さい。

第二十七回源立寺法華講総会のご案内

第二十七回源立寺法華講総会が、六月八日（日）午後一時より開催されます。

法華講の年間行事では、十一月のお大会式と、六月の法華講総会が二大行事です。日頃の信仰体験を発表したり、他寺院のご僧侶による講演などに、改めて自身の信仰を見つめ直す、よい機会となっています。どうぞ、他に優先してご参加下さい。

【水無月詠草】

細くとも 深く根付くる 庭うちの
〔坂本フミ子〕

柵われの 背丈越したり

改札を 出づれば耀う 芝桜に

拘りいしこと 一気に解かるる

〔橋本義一〕

ただ一つ 戦場となりし 沖繩に

何報いらや 今も基地基地

リハビりに集う人らの さえずりは

樹樹のねぐらに 群れる雀か

〔橋本 圓子〕

五十回忌の 姑の法事 つとめたり

池田源立寺に 一族集う

住職に 和しつつ法事 唱えしは

姑を知らざる 孫ら曾孫ら



芍薬の花

六月の行事

- 一日(日) 午前八時 講中勤行会・幹事会
午後二時 お経日
- 七日(土) 午後二時 広基寺お講
- 八日(日) 午後一時 第二十七回法華講総会
- 十三日(金) 午後一時 お講
- 二十二日(日) 午後二時 法華経講義
- 二十八日(土) 午後二時 教学研鑽会

※六月一日の継命新聞の発送は、『旭丘・緑丘』が担当地区です。

今月の宅お講

- 七日(土) 午後二時 神戸地区(松田頼昭宅)
- 十四日(土) 午後一時半 槻木地区(佐久間勝治郎宅)
- 二十日(金) 午後一時半 宝塚地区(吉田瑛子宅)

※宅お講の申し込みは、源立寺までお願いします。
締め切りは、毎月二十日です。

恵日

平成九年六月号 通巻二十八号
平成九年六月一日発行

編集兼 菅野 憲 道
発行人 恵日編集室

〒五六三 池田市槻木町一〇 源立寺内
TEL (0727) 511315
E-Mail: genwombal.or.jp
BBS: PXH05170 (NIFTY) BMC92733 (PCVAN)